



＝令和7年度竜王小学校だより＝

竜の子

令和8年 2月 2日

No. 8

校長 松井 渉

いつでも新鮮な気持ちで！

1月9日（金）から3学期がスタートしました。冬休みは伝統行事が多いけれど、子どもたちは何を経験したかな、どんな冬休みを過ごしたかな、早く子どもたちの話を聞きたいなと思いながら、9日の朝、子どもたちを待っていました。寒い朝でしたが、子どもたちは笑顔で登校をしてくれました。3学期の始業式は、感染症予防のためにリモートで行いました。私からは、以下のような話をしました。

新年を迎えて、冬休み中にめあてをたてた人もいます。めあてをたてていない人は、新しい年を迎えたこの時期は、めあてをたてるのに最も適した時期のひとつなので、何かめあてをたてると思います。ところで、めあてをたてた人は、どんなめあてをたてたのでしょうか。今年は友だちを増やそうとか、家の手伝いをたくさんしてみようとか、自主学習を頑張ろうとか、それぞれの目標に向かって少しずつでもいいから進んでいきましょう。3学期は、1学期や2学期に比べると、学校に来る日はとても少ないです。ですから油断していると、あっという間に終わってしまいます。そうならないように、計画的に過ごしましょう。

さて、新しい年を迎え、新しいめあてをたてるということは新しい自分をつくることです。今までの自分を振り返って、良くできているところをさらに伸ばし、十分にできていなかったところをなおして、もっと良い自分をつくっていきましょう。でも、それは簡単なことではありません。変わるということは難しいことです。どうしても人は今まで通りにやりたくなくなってしまふものです。今まで通りの方が、いろいろ考えなくて楽だからです。立派なめあてを立てても、それがなかなか実行できない理由はそこにあります。めあてを実行するという事は、今までとは違うやり方をするということだからです。ということは、めあてを達成するためには、今まで通りにやりたいという気持ちを捨てて、新しい気持ちで挑戦するという心がけが大切だということになります。もう亡くなってしまいましたが、小沢道雄さんというお坊さんの話をします。

小沢さんは、2本の足のどちらも膝から下がなかったので「足なし禅師」と呼ばれていました。禅師というのは、立派なお坊様を尊敬して言う呼び方です。

小沢さんは戦争に行っていました。戦争に負けてシベリアというとても寒いところで働かされました。ある日、逃げようとした仲間を止めようとして見張りの兵隊に撃たれてしまいました。傷を治すため病院に運ばれましたが、マイナス何十度という寒さの中だったため、両足が寒さで凍傷になってしまい、膝から下を切り離すしか治療ができなかったのです。小沢さんは、その後、命がけで日本に帰ってきました。しかし、日本での生活も大変でした。家族が食べるために必死で働いているのに、自分は何もできなかったからです。何度も死んでしまいたいと思ったそうです。

しかし、ある時、ひらめきました。「27年前に生まれたことをやめにして、今日、生まれたことにすれば、両足がないまま生まれたことになるのだから、一切文句はない」ということをです。そして、「微笑みを絶やさない」「人の話を素直に聞く」「親切にする」「絶対に怒らない」という4つを心に誓ったそうです。こうして小沢さんは、最後は岐阜県のお寺の住職さんになり、58年の生涯を終えました。小沢さんは何度も、腕や足がちゃんと動いていればよかったと思ったでしょう。でも、いつまで考えていても、腕や足が動くことはありません。そう自分に言い聞かせるために「本日ただいま誕生」というすごい考え方を自分で発明したのです。小沢さんと私たちを単純に比べることはできませんが、小沢さんが「自分はたった今生まれたんだ。ここがスタートなんだ。」と思って、昔のことはきれいさっぱり忘れて新しい道を探ったことは、参考にすることができるのではないかと思います。

3学期に入り、1ヶ月が過ぎようとしています。3学期は振り返りの場面を設け、自己の成長を自覚させるとともに、「4月からどんな〇年生（中学生）になりたいか。そのために、いま、何をするといいか。」などを考えさせることを通して、前向きに行動する気持ちを高めてまいります。

創工様 ありがとうございます！

11月に行われた第2回学校運営協議会の折に、「落ち葉入れがいっぱいになり、落ち葉があふれていて苦慮している。」ということ相談差し上げたところ、早速、森澤協議員様が、お知り合いの「株式会社 創工」様をご紹介くださいました。創工様も、「子どもたちが学ぶ環境整備のためなら」とボランティアで、落ち葉を入れるための穴掘りをおひきうけくださいました。感謝の気持ちでいっぱいです。子どもたちのために学校の環境整備にお力添えをいただき、地域の方に支えられた学校であると改めて感じています。ありがとうございました。

自分以外の人、もののために！

もうすぐ「ミラノ・コルティナ 2026 オリンピック」が始まります。きっと日本の選手たちは大活躍をしてくれるでしょうし、アスリートたちの正々堂々とした爽やかなプレーは私たちに感動を与えてくれることと思います。しかし、拍手も歓声もないところで頑張った人たちがいます。オリンピックに感動的な金メダルの物語があったことを知るとともに、自分がいろいろな場所で、自分の役割をしっかりと考え行動することができるきっかけになれば嬉しいです。

30年近く前、1998年の長野オリンピックの男子スキージャンプ団体戦で、日本チームが大逆転で悲願の金メダルを獲得したのをご存じの方も多いと思います。

この金メダルにもう一つのお話があったことをご存知でしょうか。

日本の男子スキージャンプチームは金メダル候補と言われながら、ジャンプ直前に突然雪が強まり、1回目のジャンプが終わった時点で4位と厳しい状況に追い込まれていた。メダルをとるには、2回目のジャンプで逆転するしかなかった。しかし、徐々に天候は悪化していった。そして、ついに競技は中断した。

このまま中止になれば1回目の結果で順位が決まる。4カ国の代表からなる競技委員は続行か、中止かを話し合っていた。しかし、話し合っている競技委員の4名は、上位4カ国と同じだった。つまり、今、中止となれば日本だけがメダルを取れない。

日本はなんとか試合続行を申し出る。すると、他の国の競技委員は「25人のテストジャンパー全員が転倒せずに飛べたら競技を再開する。」と、通常ではありえない条件を出した。命の危険も伴う悪天候の中、金メダルへのかすかな希望は25人のテストジャンパーに託された。テストジャンパー達は、「日本がメダルをとるため」に一丸となって全員、大飛行を決めていった。

25人目、最後に飛んだ西方さんは「とにかく大きなジャンプを」という一心だった。長野オリンピックでは腰痛のために選手には選ばれなかった西方さん。テストジャンパーをするのはプライドが傷つくことだった。しかしその悔しさよりも、日本代表メンバーにメダルをとらせたい・・・その強い思いでテストジャンプに挑んだ。

そして、西方さんは、雪で視界が遮られる中、K点を越す123メートルの大ジャンプをやった。

競技の継続が決定し、日本は見事、金メダルを獲得することができました。

自分以外の人、もののために気持ちを一つにした時、人は想像以上の強い力を発揮できるのかもしれない。